
さまざまな死ととまどう家族

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.58-66)

2012年9月28日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

はじめに

本来、災害の現場で黒とトレージされた人は、病院に搬送されることはない。しかし東日本大震災では、遺体となっていることがわかっていても病院へと運ばれてきた。この論文は、石巻赤十字病院の麻酔科医である日下潔さんと看護係長である佐藤京子さんが多くの遺体が運び込まれたトレージでの黒エリアでの出来事を報告したものである。

震災後、自衛隊によって収容された遺体は救急隊に引き渡された。本来なら、遺体は遺体安置所に運ぶべきだが、今回の震災では遺体安置所、葬儀社も大きな被害を受けたことから、病院へと運ばざるを得なかった。また、赤エリアにいた患者も次々と黒エリアへと移されていった。黒エリアでは、医師により死亡診断書が書かれ、死にいたった経緯の説明が家族へされ、その後看護師が家族を引き継ぎ、遺体の対応についての説明がされる。どの家族も例外なく、突然の死に心の整理がつかずに、泣き叫ぶか、黙りこくるかのどちらかの反応をしめしていた。死にとまどうそれぞれの家族にしてあげられることは、ただそばにいてあげることだった。時には、遺族のために、泥に汚れた幼い少女の遺体を拭ききれいにするという、本来病院の仕事ではないと思われることも行われた。黒エリアの患者・遺体が増えるにしたがい、また、その患者の死が明らかになるにつれて、黒エリアについているスタッフの精神的負担も増強していった。事務、検査技師、心理士なども医師、看護師とともに24時間交代で詰め、遺族に遺体を引き渡す役割を担った。ふだん死に触れることの少ないその方々にとってその精神的負担はより大きいものであった。3/11 から 5/8 まで石巻赤十字病院から、合計 220 体の遺体が運び出された。